

## 南信子の保育思想の形成（２）

### －立花富の実践から見たランバス女学院附属幼稚園の自由教育－

#### The Formation of MINAMI Nobuko's Thought on Early Childhood Education and Care (2) :

#### －Liberty Education at the Attached Kindergarten of Mary Lambuth Girls' School Analyzed through TACHIBANA Tomi's Practice－

熊 田 凡 子

#### 要旨

本稿は、「南信子の保育思想の形成（１）」（『北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要』第7号）に続き、南信子の保育思想の源泉を辿る研究の一端として、ランバス女学院の自由教育の先駆的役割を果たし後に南信子の恩師となる立花富の保育実態に迫り、その中から見えてくる子ども観や教育観を明らかにする試みである。進歩主義教育導入の拠点として、広島女学校が子ども中心の考え方を試みてきたことが、ランバス女学院において実現したのであった。その実践者は立花富である。ランバス女学院附属幼稚園では、子どもの経験による創造が展開されていた。立花は子どもの自発性や創造性、さらに想像性を大事にしていた。

**キーワード：**キリスト教幼児教育の先駆性(pioneering of Christian early childhood education)／1930年代の「記念帖」(the memorial book in the 1930's)／自治(autonomy)／想像性・創造性(imaginative/creative)

#### 1. はじめに

本稿は、1930年代のランバス女学院附属幼稚園（聖和幼稚園の前身、現・関西学院幼稚園）「ランバス幼稚園記念帖」に残された立花富の記述内容から、当時のキリスト教幼稚園における自由教育（自由保育）の実態を明らかにすることを目的とする。

日本の幼児教育界では、大正から昭和初期にかけて、アメリカのジョン・デューイの進歩主義教育いわゆる自由教育をいち早く導入したのは、コロンビア大学でパティ・S・ヒル<sup>1</sup>の下で学んだマーガレット・M・クック<sup>2</sup>である。1928年、クックは、ランバス女学院附属幼稚園において、コロンビア大学卒業のアン・ピービー<sup>3</sup>とルツ・フィールド<sup>4</sup>の指導下で立花富に自由作業を中心

とした自由教育の実践を担当させた。

ところが、日本の幼児教育における自由教育の研究では、ランバス女学院に着目したものは極めて少ない。橋川喜美代「子ども主体の協同的活動から自由保育へ—広島女学校附属幼稚園の自由作業の取り組みから—」<sup>5</sup>は、協同性をいかに育むのかを広島女学校附属幼稚園（ランバス女学院附属幼稚園（1921年～）の前身）の取り組みから、年史等で示されている史料（当時の指導計画及び保育予定表）を用いて、ランバス女学院附属幼稚園の自由教育への形成過程を述べている。しかし、そこに携った宣教師や保育者らの考えに深く踏み込んだ考察は見られない。また、クックの保育者養成課程や教育方法に関する研究<sup>6</sup>はあるものの、自由教育導入期におけるキリスト教幼稚園の自由教育について、当時の実態や、教育実践者の中で保たれてきた精神は先行研究において十分に明らかにされていない。特に、その実践を担った立花

KUMATA, Namiko

北陸学院大学 人間総合学部 子ども教育学科  
保育課程論、乳児保育、教育学文献講読

富については着目されてこなかった。

本稿では、以下の3点を明らかにする。

第一に、立花富が綴った「ランバス幼稚園記念帖」から、ランバス女学院附属幼稚園における教師(立花)の視点や子どもの様子を明らかにする。

第二に、当時、日本人実践者がキリスト教幼児教育をどう捉えていたのか、その本質についての考察をする。

第三に、上記の2点を通じて、立花富らがランバス女学院附属幼稚園で実践したキリスト教幼児教育の先駆性について、明らかにしたい。

本稿では、立花富の教育実践に表れる子ども観や教育観が、後に教え子となり同僚となる南信子に継承されていったと考えられるため、南の保育思想の源流を、立花富のキリスト教幼児教育の実態に遡り検討を試みたい。

## 2. 研究史料と方法及び南信子と立花富について

本稿において用いる一次史料は、「ランバス幼稚園記念帖」1933～1937年度の5冊である。それらには子どもの視点に立った立花富の記録が残されている。これらの記念帖は、それ以前の保育記録にある出来事・事象の報告とは異なり<sup>7</sup>、生活や自由作業の中で湧き上がってくる子どもの思いや考えに寄り添っているような鮮明な綴り方で残されている。これが記念帖における立花富の記録の特徴である。

また、それに関連した貴重な資料として、1979年10月に聖和女子学院歴史資料室にて行った立花富の聞き取り記録がある。ランバス女学院で自由作業や自由遊びを取り入れた当初を回想したものである。当時の状況を具体的に振り返り、聖和史等の年史には語られていない出来事や思いが残されている。いずれも関西学院聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センターに所収されている。

本稿では、上記の史料から、自由教育の実態やその中で重視していた幼児教育の捉え方を分析し、立花富の子ども観及び幼児教育観を考察する。

次に、南信子と立花富の関係について述べておく。南信子(1914-2003)(本名:南信、通称名:南信子)は、北陸学院保育短期大学(現・北陸学院大学)の創設(1950年)に関わり戦後の日本キリスト教幼児教育の指導者の一人である。南は

1937年4月から1940年3月までランバス女学院(聖和女子学院、現・関西学院大学教育学部聖和短期大学の前身校)で幼児教育を学び、その後キリスト教主義幼稚園2園で主任保姆を経験し、1943年4月から1949年3月まで聖和幼稚園で保育を営んだ。

立花富はランバス女学院で南に幼児教育を教え、且つ同附属幼稚園の保姆として南の教育実習指導を行った。その後、1943年に南と立花は聖和幼稚園で幼児教育に携わった。南信子は1949年まで、立花富は1945年まで聖和幼稚園に関わった。

なかでも、南は、「ランバスから聖和の時代、立花先生のすべてを吸収したい」<sup>8</sup>と思い、立花の実践が南自身の保育理論を支えるものとなったのである<sup>9</sup>。

そこで、本稿では、立花富の実践の根源、すなわちランバス女学院附属幼稚園における自由教育に着目した。

## 3. ランバス女学院附属幼稚園における自由教育の先駆け

1919(大正8)年11月、広島女学校とランバス記念伝道女学校が合併し、ランバス女学院が開校し、1922(大正11)年2月、ランバス女学院附属幼稚園は開園した<sup>10</sup>。当時、クックの意向は、「子どもらと共に生きる」ことが目的であること、保育は「『遊び』による方法」によるもので、キリスト教幼児教育を行う幼稚園の姿勢と教師の心構えを強調した。すなわち、神が子どもに与えられた生来の本能である遊び(身体的活動、精神的活動)を用いて、子どもの興味、知識欲、活動欲を刺激して、幼稚園の日々の活動を進めるものとした。1925(大正14)年のランバス女学院附属幼稚園規則では、「保育科目は、遊戯、唱歌、音楽、児童劇(律動運動、話、会話)、自然に関する談話、手技とす」と示した<sup>11</sup>。

立花富は、1922年4月から1923年3月までランバス女学院保育専修部に学んでいる。卒業後は、広島女学院附属鷹匠町保育園の保姆として勤務し、1927年にはランバス女学院附属幼稚園保姆に、翌年主任保姆となった。(文末註最終頁には、立花富とランバス女学院附属幼稚園について年譜として提示している。)

一方で、1926（大正15）年、日本の最初の幼児教育に関する勅令である幼稚園令が制定された。幼稚園令施行規則では、保育五項目（遊戯・唱歌・観察・談話・手技等）を示した<sup>12</sup>。幼稚園令では、その目的を明確にし、「幼稚園ハ幼児ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ発達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」とした。従来、「善良ナル習慣」だったのが「善良ナル性情ヲ涵養」することに改められ、より広く人間性の基礎を培うことが望まれるものとなった<sup>13</sup>。その後、日本の幼児教育は、倉橋惣三らが自由な保育を発展させていったと言われている<sup>14</sup>。しかし、それより先駆けて幼児の自由教育を実践したのがランバス女学院であった。実際に幼児教育を推進させたのは、立花富ら保姆によるものであった。

1928（昭和3）年、クックをはじめとしたコロンビア大学のティチャーズ・カレッジ幼稚園教育部門でP・S・ヒルから学んだ南メソジスト監督教会女性宣教師らによる進歩主義の導入が、日本の幼稚園における先駆的な自由教育の実践となったのである。幼児教育（保育）内容は、毎日の遊び、作業、会話、リズム等、子どもが中心にある具体的な活動で、幼児教育（保育）課程は、時間割によるものではなく、教師の計画通りに進めることがなくなった<sup>15</sup>。

これらの実態を立花富が「ランバス幼稚園記念帖」に残していたのである。

## 4. 分析と考察

### 4-1. 記念帖の構成と立花富の記述の特徴

1933～1937年度「ランバス幼稚園記念帖」は以下のような内容で構成されている。

表1では、記念帖の1933（昭和8）年度の各頁の項目（内容）を一覧にして掲載した。

記念帖は、幼稚園での思い出の出来事や日々の生活場面等を写真や文字で示した構成となっており、約30頁を使用し様々な内容が含まれている。上質な和紙に謄写版で印刷したものである。「感謝祭」や「クリスマス」のキリスト教行事及び「明治節」「紀元節」「ひなまつり」等の日本の国家行事や文化関連行事などが行われていた。

前述したように、「ランバス幼稚園記念帖」の発行は、1933年度から開始したものではない。前

段階の史料が2点残されているが、写真とタイトルのみであるため詳しい実態は見えてこない。1933年度は、立花富がアメリカ留学から9月に帰任した年であるため、『昭和八年度終了 ミドリグミ』（記念帖）以降から、立花の思いや考えが加わった記述があると検討できる。本稿では、一次史料である記念帖に描かれた実態を明らかにすることを目的としているため、立花の留学時に関する事項については今後の課題としている。おそらく、子どもの特性を捉えた子ども理解に関する領域を学んだと伺える<sup>16</sup>。

記念帖『昭和八年度終了ミドリグミ』では、例えば「クマノアソビ」（熊の遊び）は「クマノアソビハ オモシロイデシタネ ミンナ オボエテ イラツシヤイマスカ オトウサン クマト オサアサン クマト アカチヤン クマヲ ツクツテ 三ビキノ クマノ オアソビヲ シマシタ・ ・ ・（後略）」（熊の遊びは 面白いでしたね みんな 覚えて いらっしゃいますか お父さん熊と お母さん熊と 赤ちゃん熊を 作って 3匹の熊のお遊びを しました・ ・ ・）と作ったもので遊んだ記事、「考へ物」では「1. ウヘデ ベンキヤウシテ シタデ ブランコ ヲスルモノ コタヘ（トケイ）・ ・ ・（後略）」（1. 上で 勉強して 下で ぶらんこ をするもの 答え時計）とあるように遊びの内容ここでは問い答え（クイズ）の中身（6問）そのものを文字で残している。他には、園児の絵画を掲載した遠足の頁や園児創作歌など、いずれも自由作業や自由遊び（創造的な遊び）の内容（作品そのもの）を示したものがあ

さらに、その後の記念帖『昭和九年度終了 ミドリグミ』になると、クラス（各年齢）担任による詳細な記述が追加される<sup>17</sup>。「アカグミノトキ」（3歳児ナースリー・スクール）、「キイグミノトキ」（4歳児）、「ミドリグミノトキ」（5歳児）の当時の記事である。なかでも、園児の生活や遊びについて鮮明に表した立花富の記述「キイグミノトキ」は注目できる。1934年の卒園児が4歳児の時の出来事である。以下のそのまま記載する。

キイグミノトキ タチバナ

キイグミノトキ ナツヤスミガスンデカラ ミドリ

グミニナルマデノアヒダ ワタクシハマイニチ ミ  
ナサント ゴイツシヨニ アソビマタタネ。九ガツ  
ノハジメニハ マダナイタリ、ハツカシガツタリシ  
テキタヒトモ クリスマスノコロニハスツカリゲン  
キニナツテ、ウンドウカイヤ、バザーヤ、クリスマ  
スノオクリモノヲツクルノニ、マイニチノ、ニコ  
ハトホントニウレシサウデシタヨ。アノトキ ツ  
クツタ ハンカチヤ、ノートブックノコト ワタク  
シモ ミナサント オナジヤウニ、イツマデモイツ  
マデモ オボエテ キマセウ。

アナタガタハ マタドノクミノヒトヨリモ、オトモ  
ダチニモ、センセイニモ ヤサシク ヨクイフコト  
ヲ キイテクダサイマシタヨ。

ドウゾ ソウシテ イツマデモノシンセツナ ヨ  
イヒトニ ナレルヤウニ、シテクダサイ。イノツテ  
キマス。

「ナツヤスミガスンデカラ」(夏休みが済んでから)から始まり、立花富が、1933年9月から翌年3月までを振り返った記述である。「オクリモノヲツクル」(贈り物を作る)子どもの表情も、創った作品も大事に覚え、人の思いや考えを「ヤサシク ヨクイフコトヲ」(優しく よく言う事を)聴く子どもたち様子を捉え、「イツマデモノシン

セツナ ヨイヒトニ ナレルヤウニ」(いつまでもいつまでも親切な 良い人に なるように)祈る、子どもを尊重した立花の思いや願いが込められた記述である。

以下に続く年度の記念帖では、立花富は園での生活や遊びにおける場面や背景を具体的に記録し、さらに頁数が増す。特に、子どもの行為や会話の実態を詳細に描き、まるで当事者であるかのように子どもの思いを表現している点は立花特有の綴り方である。記述は常に立花が語りかける調子である。

次に、立花の綴り方に着目しつつ、ランバス女学院附属幼稚園における立花富の自由教育の特徴を考察する。キリスト教幼稚園の幼児教育の中で、子どもの存在をどのように大事に捉えていたのか、また、導入した自由作業や自由遊びがいかなる展開だったのか。

#### 4-2. 自分の思いを表現する自由教育—自由作業「オシゴト」の特徴

立花の記述は、自由作業における実際の様子を鮮明に描いているものは多い。『昭和十一年度終了』には、画用紙に切った紙が上手く貼れない子どもの状態や発した言葉のやりとりまで記してい

表1 ランバス幼稚園記念帖(1933年度)

|    |                       |     |   |
|----|-----------------------|-----|---|
| 表紙 | 昭和八年度終了 ミドリグミ         |     |   |
| 1  | ワタクシタチノセンセイ           | 16  | バザー (写真)                                  |
| 2  | 名前寄書 (園児直筆)           | 17  | 感謝祭 (讃美歌)                                 |
| 3  | ランバス幼稚園 (写真)          | 18  | 感謝祭 (写真)                                  |
| 4  | 春の生駒山 (写真) (親子遠足)     | 19  | クリスマスノウタ (讃美歌)                            |
| 5  | うるはしきあさも (讃美歌)        | 20  | クリスマス (十二月二十一日午後四時)                       |
| 6  | 花よ花よ (讃美歌)            | 21  | たのしいクリスマス (写真)                            |
| 7  | 熊のお家 (写真) (箱積み木)      | 22  | ミドリグミノウタ 園児創作歌                            |
| 8  | クマノアソビ                | 23  | 紀元節 (写真)                                  |
| 9  | ドングリコロコロ歌             | 24  | 聖句 常に喜べ 絶えず祈れ すべてのこと感謝せよ テサロニケ前書五章十六節-十八節 |
| 10 | アキノエンソク(玉手山遊園地)十月二十八日 | 25  | 郵便遊び 飛行郵便 (写真)                            |
| 11 | 秋の玉手山 (写真)            | 26  | ひなまつり (写真)                                |
| 12 | 考へ物 ミドリグミ (記事)        | 27  | オワカレノウタ                                   |
| 13 | 幼稚園の玄関 (写真)           | 28  | 名簿 姓名・住所・学校名 (進学先)                        |
| 14 | 運動会                   | 29  | 名簿 姓名・住所・学校名 (進学先)                        |
| 15 | 明治節・私たちの旗 (写真)        | 裏表紙 |   |

表記の項目は、記念帖に記されている文字をそのまま表記した。括弧内はその中身が何であるか説明を筆者が加筆した(数字は頁番号を表記)。

た。「ソノトキノ ニツキヲ キカセテ アゲマセウ」(その時の 日記を 聞かせて あげましよう)と、立花は記録から振り返っている。以下続く一部をそのまま記載する。

(昭和十一年度終了)

オトコ ヒト ナカ  
男ノ人ノ中ニハ スグニ 緑組 ノ 人達 ト  
ハコツミキ  
箱積木 デ スベリダイ ヲ コシラヘテ スベツ  
テキルカタ ガ アリマス。エボン ヲ ミタリ  
ボウ  
棒サシ ヲ サシタリ 六色三體ヲ ナガクツナイ  
デ 首カザリ ヲ ツクツ タリ、 積木 ヲ シ  
タリ ミナ イソガシソウデス。女ノヒト タチ  
ハ タイテイ 画ヲ カイタリ キノフ カツテ  
イタダイタ ハサミデ 赤イ紙 ヲ キツテ キマ  
ス。瑞子チヤン ガ キツタ 紙ニ ノリヲ ツケ  
テ 画用紙 ニ ハリマシタ。  
ヨク ミルト ウラガヘシ ニ ナツテキマス、美  
チ コ  
智子チヤン ハ 三枚 キツタノガ イクラ 並ベ  
テモ 画用紙 ノ表 ニハレ ナイノデ 「センセ  
イ ミンナ ハレマセン / \」ト コマツテ キマ  
ス。  
オトナリ ノ環サン ハ サツサト ハレナイ ト  
コロ ハ ミンナ ウラ ヘ オリマゲテ シマヒ  
マシタ。コンナフウニネ。☒ ☒ (折り曲げた  
部分を黒く塗りつぶし示した☒である)

年上の子たちと箱積み木で滑り台を創り遊ぶ男児、絵本を見る子、恩物をする子、恩物を首飾りに見立てる子、積み木をする子というように、立花は、自由作業の中で自分でしたいことを決めて遊んでいる子どもたちを記録していた。

美智子ちゃんの「コマツテ キマス」(困っています)、環さんは「サツサト」(さっさと)とあるように、立花は1人1人の様子をよく観察している。固有名詞を用いて、個々の子どもの表情や動きに内在する気持ちを大事にしていた。「コンナフウニ」(こんなふう)と、☒に示してまで、子どもの内面を深く捉えて書き留めていた。

また、『昭和十年度終了』では、自由作業「オシゴト」の具体的な背景と展開を表す記述がある。

(昭和十年度終了)

ダン / \ オシゴト ヲスル ヒト ガ フェテ

キタノハ ナツヤスミガ スン デカラ クリスマ  
ス ノオクリモノヲツクル ジブンデシタ。  
ユフヤケヤ、ニジヤ、ヒトノエヲ カイタリ、メガ  
ネヤ、マワリドウロウ ヲコシラヘタリ、木デ ヒ  
コーキヤ オフネヲ ツクツタリ シテクダサイマ  
シタ。オフネ ニクルマ ガツイテキルノヲ ミド  
リ グミ ノヒト ガ ミツケテ、オカシイナ  
トワラツテモ「ヒイテユクノヤモノ カマヘン / \」  
ト イクツモ クルマヲ ツケタ ガツタ ヒトガ  
アリマシタ。

「オシゴト」では、夕焼け、虹、人、メガネ、回り灯籠、飛行機や船を「ツクツタリ」(作ったり)とあるように、子どもの日々の生活を通じて湧いてくる興味や関心に関連した物事を描いたり製作したりすることで、子どもの要望を表現していた。立花は、自由作業の中で1人1人の心の内側で、してみたいと思い描くことを大事にしていたと考えられる。また一方で、「オフネ ニクルマ」(お船に 車)を付けるという子ども独自の発想で創られた作品に対して、立花を始め子どもたちは受容し尊重していた。自由作業では、1人1人の製作した作品そのものと、それを作るに至るまでの思いや考えを認め合っていた。だから、たとえ年長組の子から、自分たちの製作品を「オカシイナートワラツテモ」(おかしいなあ と笑っても)と指摘されても、「カマヘン / \」(かまへん かまへん)と励まし合い自信を持ち、「イクツモ クルマヲ ツケタ ガツタ ヒトガ アリマシタ」(いくつも 車を 付けたがった 人が ありました)と遊びを展開することができたのである。

このように、自由作業では、子どもらは自由に思い思いを表現していた。自由作業を通して、1人1人の思いや考えが肯定的に受け止められ、個々の自立につながっていったと考えられる。次に、自由遊びや生活場面に見る自由教育の展開を明らかにする。

#### 4-3. 子どもが自発的に創り上げていく自由教育—子ども社会が生み出す可能性

立花は、自由遊びの中で育つ子どもたちをどのような視点で観ていたのか。「ヤドガへ」遊び(『昭

和11年度終了』)に注目する。以下一部をそのまま掲載する。

(ヤドガへ 遊び)

ワタクシガイマデモオモヒダス ノハ、キイグミ  
ニ ナツテ 三日メノアサ、アナタガタガ シテ  
クダサツタ 「ヤドガへ」 ノ アソビデス。セン  
セイタチハ タダ ミテキルダケ デシタガ、ケン  
カモナク、ナクヒトモナク、ミンナ ホントニ ウ  
レシサウニ、イソガシサウニ、「ヤドガヘヤ/」  
ト オニハニ アツタ ゴザヤ オモチヤ ラ ク  
ルマニツムヒト、ハコブヒト、オロスヒト、ト  
テワケシテ トテモ ギョウズ ニ アソンデクダ  
サイマシタ。ムツカシイ オコトバ デスガ アナ  
タガタハ 自治 トイフ コトガ ハジメ カラカ  
ンシン スルホド ヨク デキ マシタ。

ここでの「ヤドガへ」遊びとは、子どもたちが、遊んでいた物を運んで移動したり、片づけたりしていたようだ。おそらく、家を見立てるあるいは店を真似るようなお家ごっこやお店ごっこでは、他の子のごっこ遊びが楽しそうに見えて、お家やお店の宿を変えて遊びたい、と憧れや欲望が出てきたのではないかと想定できる<sup>18</sup>。なかでは、互いに思い思いを出して、折り合いがつかない場合があったかもしれない。しかし、子どもたちは自分のことだけではなく他者にとってもどうしたらよいかを考えた。そこで、子ども自ら考えて、自由に遊びの構成を行うような「ヤドガへ」遊びという展開になった。

立花は、子どもが自分たちの思いや考えで判断し、動き出す様子を見守っていた。子どもが自ら考えて行動することに任せていたのである。自由に自分たちで発展させていくことを尊重していた。だから、立花は子どもたちの遊ぶ様子を敢えて「自治」という言葉で強調した。1人1人が自ら心と体を動かす子ども社会を大事にした立花の自由教育の見方である。

さらに、「大好き<sup>ダイスキ</sup>ダツタノハ<sup>ハナシ</sup> お話<sup>ワタシ</sup>ヲツクツタリ、<sup>カンガ</sup>考<sup>モノ</sup>ヘ物<sup>ウタ</sup>ヲツクツタリ<sup>ウタ</sup> 歌<sup>ウタ</sup>ヲ唱<sup>ウタ</sup>ツタリスルコトデシタ」(大好きだったのは お話を作ったり、考え物を作ったり 歌を歌ったりすることでした)と、立花の子ども1人1人認め合う自由教育は推進さ

れていった。次の記録が物語っている。(ツリクバナシ・カンガエモノ・ゴソウダン等の中から一部引用した。)

『花<sup>ハナ</sup>ト植<sup>ウエ</sup>木<sup>キ</sup>鉢<sup>バチ</sup>ガアツタ。花<sup>ハナ</sup>ニ水<sup>ミズ</sup>ヤツタラ イクラヤツテモ大<sup>ウエ</sup>キクナラント植<sup>ウエ</sup>木<sup>キ</sup>鉢<sup>バチ</sup>ガ 大<sup>オホ</sup>キクナツタ。ナンデカ?』コレモコノコロノ考<sup>カンガ</sup>ヘ物<sup>モノ</sup>。『ソラ水<sup>ミズ</sup>ガ花<sup>ハナ</sup>ニカ、ランデ 植<sup>ウエ</sup>木<sup>キ</sup>鉢<sup>バチ</sup>ニカ、ツタンヤ。ソレデ植<sup>ウエ</sup>木<sup>キ</sup>鉢<sup>バチ</sup>ガ大<sup>オホ</sup>キクナツテ花<sup>ハナ</sup>ハ一寸<sup>チヨツト</sup>モ大<sup>オホ</sup>キクナラナンダノヤ。』『チガフ』『ソナラナンデ?』『花<sup>ハナ</sup>ハナ、水<sup>ミズ</sup>ヤルトキ イツモ サンポニイツテ、ルスヤツタンヤ』。コンナ時<sup>オトナ</sup>大人<sup>ワタシ</sup>ノ私<sup>ナニ</sup>ハイツモ何<sup>イ</sup>モ云<sup>イ</sup>ヘナイデタダ感<sup>カンシン</sup>心<sup>シン</sup>スルバカリデシタ。

創り話や会話、相談事には、子どもたちが意見を出し合う様子が詳しく綴られている。立花は、子どもは「花<sup>ハナ</sup>ハナ、水<sup>ミズ</sup>ヤルトキ イツモ サンポニイツテ、ルスヤツタンヤ」(花はな、水をやる時 いつも 散歩に行つて留守やったんや)というように創造的で想像的に自由な発想を抱くことができ、子ども同士でよく考え合うことができる「感心スル」存在であると捉えていた。そのような、自由な遊びの中で見られた子どもの育とうとする可能性を、続く記述に「ナンデモ面白<sup>オモシロク</sup>ク、ナンデモ考<sup>カンガ</sup>ヘラレルカソシテ何<sup>ナニ</sup>デモツクルコトノデキルカハホントニ大切<sup>チカラ</sup>ナ力<sup>チカラ</sup>」(何でも面白く、何でも考えれる力そして何でも作ることのできる力は本当に大切な力)と表現している。さらに、立花は「ドウゾイツマデモノハキイグミノトキノヤウニ ソノ力<sup>チカラ</sup>ヲ使<sup>ツカ</sup>ツテ下<sup>ツカ</sup>サイ。キット タクサンノヨイシゴトガ デキマスヨ。私<sup>ワタシ</sup>ハソレヲ タノシミニシテキマス。」(どうぞいつまでもいつまでも黄組の時のように その力を使って下さい。きっと 沢山の良い仕事ができますよ。私はそれを楽しみにしています。)と、自由教育の中で培ったことが活かされると確信していたと考えられる。

自由教育を通した子ども社会の中で、自立していく子どもの姿が、ランバス女学院附属幼稚園の自由教育実践を確実にしたのではなかろうか。立花は、自由遊びによって、育つ力を信じると同時に、尊い特性を持つ子どもの存在を受け止めていた。立花は子どもの発想や世界観を次のように見

ていた。

#### 4-4. キリスト教幼稚園における創造的想像的な自由教育—自由な子どもの世界観

立花が、子どもをよく観察し、子どもが抱く思いや願い、さらに創造力や想像力を大事にしていたことは、記念帖の詳細な記録に表れている。立花は、子どもの自由な発想や特有の世界観、つまり子どもの可能性を高く捉えていた。

（昭和十一年終了）

ブラックサンボー サンモ スキデシタヨ 絵（ブラックサンボー） トラ ガ デテキテネ、 トキニハ 絵（船） コンナ エ ラ カイテ 「オ口カラ 火ヲ タイタノダ」「チガフ服 カラダ」「イ、エ耳カラダ」ト オホサワギヲシタ コトモ アリマシタ。大人デハ カンガヘラレ ナイ セカイヘ ミンナデ ツレテ イツテ 下サツタ コトラ ワタクシ ハ イツモ カンシヤ シテキマス。

子どもたちの持っている発想や空想に心が動かされた立花の記録である。「オ口カラ 火ヲ」（お口から 火を）というような「大人デハ カンガヘラレ ナイ セカイ」（大人では 考えられない世界）に、立花は驚かされ感動したのである。子どもの秘めている力によって、色々な感じ方や考え方に気付かされ学ぶ保姆たちであった。子どもが思い描く可能性を高く評価していた。

さらに、子どもの空想的な世界観は、「カミサマ ガ ドコニ イラツシヤルノダラウカ」（神様がどこに いらっしゃるのだろうか）という展開にまでなっていた。

（昭和十年終了）

オイノリ ハ ハヤクカラ ミンナ ヨク シテキテ クダサイマシタガ カミサマ ガ ドコニ イラツシヤルノダラウカ ト イフノガ コノコロノアナタガタ ノフシギデハ タマラナイ コトニナリマシタ。クモノ上ニ イラツシヤル トオモフヒトヤ、ウミノ上ニ イラツシヤルトイフ ヒトヤラ、マタキツト ランバス ノ オニカイ ニ イラツシヤル ト イツテ サガシニイツタ ヒト モ アリマシタネ。「ダレノココロニモ カミ

サマ ノカゲ ガ ウツツテキル トオモフ」ト ミドリグミ ノヒトガ オシヘテ クダサツタノデ ソノオハナシ ハナクナリマシタガ イマデモ マダ カミサマヲ サガシテ キルヒトガアルデセウネ。ソレハホントニヨイコトデスヨ。ジブンデ ヨクワカルマデ イツマデモハ サガシテ クダサイネ ソシテドウゾ オホキク ナリ オトナニナツテモ ワスレナイヤウニ ナンベン モキイグミノトキノ オハナシヲ ヨンデクダサイ。

これは、キリスト教幼稚園の子どもの対話や行為を表わす貴重な記録でもある。「ダレノココロニモ カミサマ ノカゲ ガ ウツツテキル」（誰の心にも 神様の影 が 映っている）けれども、「ジブンデ ヨクワカルマデ イツマデモハ サガシテ クダサイ」（自分で 良く分かるまで いつまでもいつまでも 探して 下さい）と願う立花のキリスト教幼児教育観が表われている。自由教育の中では、いつも素直に神を探し求めることができると、立花はそのように子どもを見ていた<sup>19</sup>。

#### 4-5. 立花富のランバス女学院附属幼稚園における自由教育—回想が示す真実

日本におけるキリスト教幼稚園での自由教育の実態は、記念帖における立花富の記述に残っていた。立花の幼児教育の実践は、一体何を意味したのか。最後に、立花がランバス女学院附属幼稚園での出来事や子どもたちの実情を振り返った、1979年10月の回想録をまとめておきたい。

立花は、ランバス時代の幼児教育の主張として回想している。

ランバス女学院附属幼稚園の自由教育は、正にコロンビア大学デューイの進歩主義教育の実現であった。それは、自由作業の実際が表している。

1928年、導入した自由作業は、子ども中心で、教師はよく子どもを観察して、子どもの求めるものから教育するという考え方であり、形式的な教師の計画で引っ張るものではなかった。自由作業によって、子どもは自ら学び、また、子どもの発想から教えられる、楽しい展開となった。子どもが経験したことの記録は、次に、これまでの経験の中から「ああかな」「これかな」と考え出すこ

とと結びついていった。自由教育の計画は教師1人で立てることではなく、子どもの経験による協同事業であって、指図ではない。つまり、ランバスの自由作業は、すべての経験から「与え—受け取る」を通して生起するものであり、教師は受け取りもすれば与えもするものであった<sup>20</sup>。

さらに自由作業の中では、子どもは自分で統制が出来るようになった。単に自由にされるという放任ではなく、好きなだけさせる中でも、使い方や考え方の制限を与えると、子どもは考えるのである。自分の責任というものを感じながら展開していった。自由は目的が発展する際に、知的な観察と判断とが働いているところに存在するので、子どもが実地に働かせることができるよう、教師によって与えられる指導は、子どもの自由を制限するものではなく、むしろ自由を助長するものである<sup>21</sup>。

つまり、自由作業は、子どもの経験によって考え、考えることによって経験していくという、経験の創造であった。ランバスの20年間は、経験の連続性による自由教育に終始していたのである。

すなわち、立花富が実践した自由教育は、デューイの進歩主義教育思想の影響に基づいたクックの意向「子どもと共に生きる」「遊びによる方法」によるものであった。

## 5. まとめ

本稿では、「ランバス幼稚園記念帖」に綴られた立花富の記述及び立花の回想から、ランバス女学院附属幼稚園の自由教育の実態を考察した。その特徴は以下のようにまとめられる。

第一に、自由作業や自由遊びの中では、子ども自らの思いや考えを表現することができた。それは、立花富が1人1人の内面を大事に受け止めていたことによるものである。立花は、子どもの内側で湧き起ってくる発想や製作品の背景まで、丁寧に記録していた。

第二に、子ども自らが考え、子ども社会の中で自主的に営もうとする創造的な遊びが連続していた。立花は、よく考え行動する子どもたちを自治と捉え、子どもの育つ可能性を信じていた。自由教育では、子どもが自分で判断し行動していく力が育っていった。

第三に、子どもたちは、聖句や讃美歌を単に覚えるということではなく、自らの経験や感覚を通して、神様に目を向けていた。自由教育の中で、子どもらが生み出す会話や遊びは創造的で想像的であった。そのように自発的に内側から動いて出てくるものを大事にするキリスト教教育の姿勢が記録されていた。立花は子どもが抱く世界観を理解し、自ら感得する子どものイメージに共感し大切にしていた。

進歩主義教育導入の拠点として、広島女学院が子ども中心の考え方を試みてきたことが、ランバス女学院において実現したのであった。その実践者は立花富である。立花の教育方針は、デューイの経験主義を基にしたクックの意図を表現したものであり、自由教育そのものであった。ランバス女学院附属幼稚園では、子どもの経験による創造が展開されていた。立花は子どもの自発性や創造性、さらに想像性を大事にしていた。これは、進歩主義教育実践の先駆的事例である。特に、これまで注目されてこなかった日本人幼児教育者立花富の幼児自由教育の実践は歴史的事実として明記できる。

このような立花の実践と姿勢がランバス女学院附属幼稚園におけるキリスト教幼児教育の継承発展を支えていた。キリスト教幼児教育を発展させていったその系譜については、後に続く聖和幼稚園における立花富と南信子の実践から見るることができるのではないかと。

本稿は、第68回大会キリスト教史学会（2017年9月15日、於：聖心女子大学）において、筆者が研究発表した内容「1930年代のキリスト教幼稚園における自由教育の実態—『ランバス幼稚園記念帖』の立花富を中心に」を、南信子の保育思想の根源の一端として、キリスト教幼児教育の先駆性について立花富の自由教育に着目し、その実態から考察したものである。



〈註〉

- <sup>1</sup> P.S. ヒル（Patty Smith Hill 1868－1946）は、アメリカにおける進歩主義幼稚園運動に貢献し、1905年からコロンビア大学のティーチャーズ・カレッジで幼稚園教育に携わり、新教育の理論的指導者であったデューイの助言のもとに、新しい幼稚園の原理と実践の研究を進め、1923年「附属幼稚園と第一学年におけるコンダクト・カリキュラム」として発表した（聖和幼稚園100年史委員会『聖和幼稚園100年史』聖和大学、1991年、40頁）。
- <sup>2</sup> マーガレット・M・クック（Margaret Millikan Cook：1870－1958）は、米国ジョージア州にてメソジスト教会牧師家庭に生まれる。初等教育専門のアトランタ保母師範学校（幼稚園師範学校）を卒業後、ニューヨークの幼稚園で教師をしていた頃、ゲーンズと出会い、1904年に来日した。クックは、保母の養成に努める傍ら附属幼稚園主任となり、広島女学校が併設する幼稚園・保育所全ての責任を持ち、母親たちの指導にもあたった。また、保母養成科の生徒たちに「日曜学校教授法」を講義した。休暇帰米の際にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに学び、再来日後、1913年、JKUの会長に選出された。常に幼児教育界の動向に注意し、デューイらの進歩主義教育をいち早く取り入れた。保母師範科の大阪移転、ランバス女学院の設立時には準備委員として、また院長が決定するまでの3年間を責任者として学院の維持運営にあたった（聖和史刊行委員会『Thy Will Be Done 聖和の128年』学校法人関西学院、2015年、106頁）。
- <sup>3</sup> アン・R・ピービー（Anne Rosalind Peavy：1896－1981）は、1896年8月24日ジョージア州バイロンに生まれる。1918年から1922年までフロリダ州ウエスト・タンパの国内宣教事業ロサ・ウォルデス・セスルメントにおいて教師。1923年8月に来日し、ランバス女学院に着任。クックの辞任に際して、1938年保育専修部部長に就任。ランバス女学院附属幼稚園の責任を持ち、特に3歳児の重要性に着目して、幼稚園にナースリースクール（年少）を設けて指導にあたった。第二次世界大戦中は、1941年から1942年までテネシー州ナッシュビルのセンテナリー・インスティテュート・コミュニティー・センターにおいて、1942年から1945年までアリゾナ州ボストンのコロラド・リヴァー日系米人強制収容所において幼稚園教師、1945年から1947年までカリフォルニア州ロスアンジェルスにセンテナリー日本人メソジスト教会の宗教教育主事を務める。戦後、1947年1月に日本へ再着任、1947年から1963年聖和女子学院、聖和短期大学において「社会知識」などの科目を担当し、自由保育の実践のために尽くす（前掲『Thy Will Be Done 聖和の128年』212頁）。
- <sup>4</sup> ルツ・フィールドは、アン・ピービーとランバス女学院ナースリー・スクールの指導をした（1927－1942年）（聖和八十年史編集委員会『聖和八十年史』聖和女子短期大学、1961年、95－100頁）。
- <sup>5</sup> 橋川喜美代「子ども主体の協同的活動から自由保育へー広島女学校附属幼稚園の自由作業の取り組みからー」『兵庫教育大学研究紀要』第50巻、2017年2月、1－9頁
- <sup>6</sup> 永井優美『近代日本保育者養成史の研究ーキリスト教系保母養成機関を中心にー』風間書房、2016年。田中まさ子『幼児教育方法史研究ー保育者と子どもの共生的生活に基づく方法論の探究ー』風間書房、1998年
- <sup>7</sup> 『ランバス女学院報』（1932年第1号、1－2頁）や『ランバス女学院同窓会誌』（1930年、47－48頁、55－56頁）では、幼稚園の様子を立花富、ピービーが記している。丁寧に事実を述べているが、子どもの思いや考えを表すような詳細な実態は分からない。また、立花が留学中時の記念帖では、1931年度は13頁、1932年度は26頁の構成であり、内容は、写真と行事の項目及び遊びや歌等の名称の掲載のみであるため、詳しい実態が読み取れない。
- <sup>8</sup> 南信子『花の蕾のひらくとき 北陸学院幼稚園の物語』2000年、398頁
- <sup>9</sup> 南信子は立花富について、「立花先生の実践こそ私の保育理論のバックボーンをなすものです。」（前掲書396頁）と述べている。
- <sup>10</sup> 1919（大正8）年、米国南メソジスト監督教会では、メソジスト派の宣教100年の年を迎えた。日本の宣教部においてもこの記念すべき年に新しい計画が進められようとしていた。同年11月、神戸のバルモア学院で開催された日本宣教部の年会において、西日本最大の都市、大阪にクリスチャンの働き人を養成する学校を創立する計画が議案として提出された。当時の教会は、日本人及びその家庭にキリスト教を伝道するというのが大きな眼目であったので、婦人伝道師と幼稚園の教師が教会において一緒に働くことが多かったのである。そこで、この両者のための教育機関を設けることによって、宣教活動をより効果的にしようという意図が宣教部にあった。すなわち、広島女学校の保母師範科と神戸のランバス記念女学校を合併して強力な養成校を創るというのである（前掲『聖和幼稚園100年史』20頁）。

<sup>11</sup> 当時の保育課程は次のようになる（前掲『聖和幼稚園100年史』31-33頁）。

◇保育時間（デイリープログラム）

- 8：30-9：00 ピアノで名前を呼ぶ、先生からの挨拶、お話
- 9：00-9：45 礼拝、全員への挨拶、カレンダーのマーク付け、会話、スキップ、マーチ、リズム
- 9：45-10：30 グループに分かれる、恩物使用、
- 10：30-11：00 戸外遊び、ゲーム
- 11：00-11：30 屋内でのゲーム
- 11：30-12：00 グループに分かれる、恩物使用
- 12：00-13：00 昼食、降園準備、お片付け、さよなら

<sup>12</sup> 幼稚園令では、幼稚園での保育内容を示す保育項目として、従来の遊戯、唱歌、談話、手技のほかに「観察」を加え、さらにそのほかにも学術の進歩、実際の経験に応じて適宜工夫しても良い余地をおくよう「等」という字が挿入された（文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに、1979年、206頁）。

<sup>13</sup> 前掲『幼稚園教育百年史』204-205頁を参照。

<sup>14</sup> 倉橋惣三は、自由遊びの保育案の実際を「系統的保育案」1935（昭和10）年に示している（前掲『幼稚園教育百年史』235頁）。

<sup>15</sup> 進歩主義教育導入後の保育プログラムは次のようになった（前掲『聖和幼稚園100年史』35頁）。

◇保育時間（自由教育導入後のデイリープログラム）

- 9：00 登園、視診、持物を片づける、自由作業、自由遊び
- 10：00 片づけ、おやつ
- 休息
- 礼拝（ある時期からは最後に礼拝をした）
- グループ活動（お話、リズム、等）
- 外遊
- （礼拝-1日の反省や話など、締めくくりに時間に礼拝をした）

12：00 降園

<sup>16</sup> 北陸学院ウイン館所収「南信研究ノート」233は、1930代に立花富が使用していた手稿ノート（英文記載）である。「Training The Toddler by Elizabeth Cleveland」のタイトルで、ノートには立花富のサインがある。筆跡より立花富のノートであると言える。ノートの最終頁には「Education of the Pre-School Child (Nursery School)」のプリントが挟まれている。立花富が米国留学時に学んだ内容の記録（一部）であることが分かる（畠山祥正・熊田凡子『「南文庫」の概要とその利用について』『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第6号』2014年3月、361-378頁）。

<sup>17</sup> 1933年度以降の記念帖の構成はほぼ同様であるが、記述の内容が追加されている。1934年度記念帖の内容を以下に示した。

|                         |  |
|-------------------------|--|
| 表紙 昭和九年度終了 ミドリグミ        | 15 世界日曜学校日（写真）                               |
| 1 ワタクシタチノセンセイ           | 16 感謝祭（讃美歌）                                  |
| 2 名前寄書（園児直筆）            | 17 クリスマスノウタ（讃美歌）                             |
| 3 卒業式（写真）               | 18 感謝祭（写真）                                   |
| 4 お庭遊び（写真）              | 19 たのしいクリスマス（写真）                             |
| 5 お庭遊び（写真）              | 20 幼稚園のおかへり（写真）                              |
| 6 うるはしきあさも（讃美歌）         | 21 やさしいエスさま（讃美歌）                             |
| 7 花よ花よ 讃美歌              | 22 <b>ミドリグミノトキ キタムラ</b>                      |
| 8 春の助松海岸（写真）（親子遠足）      | 23 郵便遊び（写真）                                  |
| 9 <b>アカグミノトキ ウエノミツコ</b> | 24 おひなさま（写真）                                 |
| 10 赤組の時（写真）             | 25 オワカレノウタ                                   |
| 11 <b>キイグミノトキ タチバナ</b>  | 26 聖句 常に喜べ 絶えず祈れ すべてのこと感謝せよ テサロニケ前書五章十六節一十八節 |
| 12 おいしいお辨当（写真）          | 27 積木のお船（写真）                                 |
| 13 お庭のお辨当（写真）・明治節（写真）   | 28 名簿 姓名・住所・学校名（進学先）                         |
| 14 アヤメイケノエンソク（記事）       | 裏表紙  |

<sup>18</sup> 続く記述からはレストラン、お店をしてカレーライスやオムライスを見立てていたことが分かる。「コノコロ、シヨクドウヤサンノ アソビノダイスキナ ヒトタチガ アリマシタネ。ゴチソウハ イツモ 「オコサマライス」ト「チキンライス」ト「ライスカレー」デシタヨ。ソレカラ ニンギヨウ シバイ、カツドウ シヤシン ノアソビガヨク ハヤリマシタ」とある。

<sup>19</sup> 立花富の回想録によれば、伝道について「私は聖書は習ったけど、伝道はどうあるべきかなんで習ってない訳でしょう。それだから教育なら出来るけど伝道はできないですね。」「ランバスだけじゃなくてキリスト教関係の幼稚園の教師は全部、午前中は伝道というのが本来の建前だった。」と語っている。「子どもの扱いがどのくらい上手かということ」を大事にしていた。

<sup>20</sup> ジョン・デューイ／市村尚久訳『経験と教育』講談社、2012年、114－115頁

<sup>21</sup> 前掲『経験と教育』113頁

立花富及びランバス女学院附属幼稚園に関する年譜

| 西暦年  | 立花富事項                   | ランバス女学院及び附属幼稚園の関連事項  | 日本の幼児教育関連事項（法令・キリスト教教育関連事項を中心に）  |
|------|-------------------------|--|--|
| 1886 |                         | ・広島女学院創立（砂本貞吉が広島女学会を創ることによって始まり、ランバスファミリーに協力を要請する。）                              | ・小学校令、中学校令、師範学校令公布（4.10）<br>・英和幼稚園設立（現存する最古のキリスト教幼稚園、金沢）（10月）<br>（小学校令に幼稚園事項を含む） |
| 1887 |                         | ・砂本により英和女学校開業（2.10）。<br>・ゲーンズ <sup>21</sup> が英和女学校着任（10月）。                       |  |
| 1892 |                         | ・英和女学校附属幼稚園開園（10.1）。<br>・ゲーンズが園長に就任。   |  |
| 1895 |                         | ・英和女学校保姆養成科開設（9月）。   |  |
| 1896 |                         | ・広島女学校と校名改称（3月）。   |  |
| 1899 |                         |  | ・幼稚園保育及設備規程制定（6.28）。<br>・私立学校令公布（8.3）。<br>・文部省訓令第12号公布。公認学校での宗教教育禁止（8.3）。        |
| 1901 |                         | ・ファンシー・C・マコーレー就任。保育にスキップを導入。   |  |
| 1904 | （立花富生まれる2.14）。          | ・マーガレット・M・クック来日（2.3）、着任。   |  |
| 1906 |                         | ・マコーレー離任帰国。<br>・クックは、広島女学校保姆養成科課長兼附属幼稚園主任、幼稚園・保育所の責任を担う。                         | ・JKU (Japan Kindergarten Union) 結成 <sup>21</sup> （8月）。                           |
| 1908 |                         | ・保姆養成科は保姆師範科と改称（4月）。   |  |
| 1910 |                         | ・クック休暇帰米。  |  |
| 1912 |                         | ・クック休暇帰任。  | ・明治天皇没「大正」と改元（7.30）。<br>・第一次世界大戦起る（7.28）。  |
| 1914 |                         |  |  |
| 1916 | （愛知県立第一高等女学校本科第一学年入学4月） |  |  |
| 1918 |                         |  | ・第一次世界大戦終結（11.11）。   |
| 1919 |                         | ・第33回米国南メソジスト監督教会宣教部年会で広島女学校保姆師範科と神戸のランバス記念伝道女学校の合同が決議され、直ちに設立準備委員会が組織される（11.4）。 |  |

| 西暦年  | 立花富事項  | ランバス女学院及び附属幼稚園の関連事項      | 日本の幼児教育関連事項（法令・キリスト教教育関連事項を中心に）  |
|------|--|--------------------------|--|
| 1920 | (同校卒業3月)<br>(名古屋市私立<br>金城女学校専攻<br>科文科ニ入学4<br>月)                          | 広島女学院<br>附属幼稚園           |  |
| 1921 | (同科一ヶ年ノ<br>課程ヲ修了ス)<br>(3月)   | ランバス<br>女学院<br>附属<br>幼稚園 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 広島女学校保母師範科とランバス記念伝道女学校が合併し、ランバス女学院保育専修部となり大阪へ移転、開設(4.10)。</li> <li>・ 広島女学校附属幼稚園はランバス女学院附属幼稚園として設立申請(10.1)。</li> <li>・ ランバス女学院附属幼稚園の設立許可を受け、正式に開園(2.23)。ランバス幼稚園規則：遊戯、唱歌、音楽、児童劇(律動運動、譚、会話)、自然に関する談話、手技。</li> <li>・ ランバス女学院神学部を併設申請(2.10)。</li> <li>・ アン・R・ピービーがランバス女学院教師に着任。</li> <li>・ 幼稚園令公布(4.22)。</li> <li>・ 幼稚園令施行規則制定 保育五項目(遊戯・唱歌・観察・談話・手技等)。</li> <li>・ 大正天皇没、「昭和」と改元(12.25)。</li> </ul> |
| 1922 | 大阪市私立ランバス女学院保育専修部入学(4月)  |                          |  |
| 1923 |  |                          |  |
| 1924 | 同部卒業(3月)<br>広島市鷹匠町私立広島女学院附属鷹匠町保育園ニ奉職ス(4月-1927年3月)                        |                          |  |
| 1926 |  |                          |  |
| 1927 | 大阪市私立ランバス女学院附属幼稚園ニ転任ス(4月)  |                          |  |
| 1928 | 同園主任保母トシテ勤務(4月-1931年6月)  |                          |  |
| 1931 | ランバス女学院ヨリ米国テネシ州ナシビル市スキヤールレットカレッジ及ベイリノイ州エヴァンストン市ナショナル師範大学ニ留学ス(7月-1933年6月) |                          |  |
| 1933 | ランバス女学院附属幼稚園主任保母トシテ勤務、同時ニ保育専修部講師トシテ幼児保育ノ科目ヲ兼任ス(9月-1941年3月)。              |                          |  |

南信子の保育思想の形成（2）

| 西暦年  | 立花富事項   | ランバス女学院及び附属幼稚園の関連事項  | 日本の幼児教育関連事項（法令・キリスト教教育関連事項を中心に）   |
|------|---|--|---|
| 1936 |   | ・P.S.ヒル著 高森ふじ訳『幼稚園及び低学年の行為課程』をランバス女学院より出版（10月）。                                    | ・「基督教幼稚園五十周年記念園児大会」開催（6.5）。   |
| 1937 |   | ・大毎保育学園は鶴橋学園と名称を変更（4月）。  |   |
| 1938 |   | ・クックは定年辞任、ピービーが保育専修部長に就任（3月）。<br>・院長に広瀬ハマコ就任（4.26）。                                |   |
| 1939 |   |  | ・「J・K・U年報」終刊（7月）。   |
| 1940 |   | ・ピービー保育専修部長辞任、広瀬院長の兼任（9.12）。   | ・JKU（1906.8-1940.7）発展的解消 <sup>21</sup> （7月）。<br>・「基督教保育」48号で廃止<br>・在日米国人引き上げ開始  |
| 1941 | ランバス女学院及附属幼稚園廃止に伴ヒ、同校及同園辞職（3月）。<br>西宮市私立聖和女子学院保育学部奉職（4月-1945年3月）。 | ・ランバス幼稚園は終止符をうつ（3月）。<br>・ランバス女学院は神戸女子神学校と合同し聖和女子学院となる（4月）。<br>・聖和女子学院保育学部開設（5.27）。 | ・国民学校令公布、幼稚園令改正（3.1）。<br>・日本キリスト教団誕生（6.24）。<br>・基督教保育連盟『日本基督教幼稚園史』（五十年史）刊行（理事長矢野貫城）（7月）。<br>・日本英米に宣戦布告（第二次世界大戦）（12.8） |

上記の年譜は、熊田凡子が、立花富に関する一次史料及び学校史等を基に作成したものである。具体的には以下の通りである。

立花富事項は、立花富「履歴書」（1941年6月7日付）（聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター所収）の内容をそのまま記載した。立花富は1945年、聖和幼稚園を退職後、福岡県戸畑市に移り教育委員を担う。西南女学院短期大学では保育原理・児童心理学・教育実習担当し、1965年から福岡女子短期大学講師という履歴である（立花富直筆「履歴書」（1979年付）・西南女学院短期大学開学50周年記念誌編集委員会『西南女学院短期大学の50年』西南女学院短期大学、2000年、50頁）。

ランバス女学院及び附属幼稚園の関連事項については、前掲『Thy Will Be Done 聖和の128年』（第I部「第1章神戸女子神学校1880-1941」、「第2章広島女学校保姆師範科1886-1921」、「第3章ランバス記念伝道女学校1888-1921」、「第4章ランバス女学院1921-1941」）、『聖和幼稚園100年史』（9-41頁）、また、附属幼稚園の組織については、前掲『聖和八十年史』（95-100頁）、及び「ランバス幼稚園記念帖」の記載事項を参照した。

日本の幼児教育関連事項については、前掲『幼稚園教育百年史』（457-490頁）、及びキリスト教保育連盟100年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』1986年、450-466頁（「略年表」）を参照した。

